

1. 大切な両親の導き

“善し悪し”は子供に反映

教育と言えば、今では皆すぐに学校を思い浮かべますが、教育とは、本来親の行うべきものであり、親の負うべき

最も大切な仕事の一つなのです。

西欧には、「親は百人の教師に勝る」という諺があります。どんなに学校教育が盛んになり、内容が立派になっても、「百までも」という“三つ子の魂”は親の手によって出来上るものであって、学校はその土台の上に建物を載せるようなものです。同じ学校で、同じ教師に同じ教育を受けても、十人が十色になるのは親の教育が異なるための当然の結果で、「親は百人の教師に勝る」という表現は決して誇張とは言えません。

その言葉を、私は「親こそ最高の教師」という言葉で表現したいと思っています。この“最高”という意味は、子供に対する影響力が文字通り“最高”だということです。

ですから、うまくいけば「親は最高の教師」ということになりませんが、

まずいくと「親は最悪の教師」ということになります。

ところが、親は“最高の教師”である場合よりも“最悪の教師”である場合のほうが昔から実際には多かったものですから、孔子やお釈迦様のような最も偉大な教師でさえ、わが子の教育はその弟子たちに任せました。とは言っても、そのすべてを弟子に委任したのではないことが、例えば次の論語の一文で知ることが出来ます。

孔子が庭に一人でいた時、息子の姿を見かけると、呼びとめて「詩を学んだか」と尋ねます。

「まだです」と答えると、「詩を学ばないと立派に物が言えないよ」と言って、詩を学ぶように教え論しています。

孔子の教育では、詩を最も重視していますが、いくら重要な詩でもこれをわが子に直接講述することをしなかったことが、右の事実で知ることが出来ます。と同時に、詩を学ぶことの重要性だけは“教”えていることも知ることが出来ます。私は、これが親の教育の在り方の最も良い手本だと思うのです。